

日露戦争期のアメリカにおける岡倉覚三の発言

岡本 佳子

(国際基督教大学アジア文化研究所準研究員)

岡倉覚三(1863-1913)のアメリカにおける「東洋」「西洋」をめぐる文明論的発言は、日露戦争の勃発と重なった1904-05年の渡米時に本格的に始まった。様々な文化・文明上の国際的言論を巻き込んだ日露戦争の性質は、岡倉の発言にも大きく作用することとなった。

戦争勃発によって国際世論で勢いを増していた黄禍論は、ロシアにとっては日本を「西洋＝キリスト教圏」の共通の敵として孤立させる有効な手段として、日本にとっては外交上の不利益を回避するために否定すべきイデオロギーとして、国際的プロパガンダの中心的課題となっていた。欧米における日本と中国への人種的・文化的偏見を政治目的に利用した黄禍論に日本が対抗するには、東アジアにおける機会均等・門戸開放の公約だけでは十分な説得力を持ち得ず、「黄禍」の否定に効果的な文化的トピックの動員を必要とした。日本政府によりアメリカに派遣された金子堅太郎(1853-1942)は、黄禍論の否定と親日的世論形成という政治目的のために、文化を動員した情報戦略を展開した。日本への注目の高まりに伴い、民間の在外日本人も欧文の執筆活動によって日本の文化的伝統や国民性を宣伝し、戦争にのぞむ日本人の精神的背景を説明する役割を果たしていた。日露の宣伝戦の場となったアメリカで、岡倉はこうした官民両動向との接点と相違とを見せながら日本人論者の動きに参入した。

岡倉は1904年3月のニューヨーク到着後、地元紙に「日本と「黄禍」」と題する論説を投稿し、民間人としては異例の早さと単刀直入な議論によって黄禍論への早急な反論を試みた。この論説は日本の官製プロパガンダとほぼ同様の開戦理由やロシア批判を展開しており、紙面登場のタイミング、内容ともに金子のアメリカにおける第一声と歩調を一にしていた。

アメリカ滞在中の同年11月に出版された『日本の覚醒』(1904)は、近代日本の「躍進」を西洋文明の摂取よりも国民的な「内的気力」によって成し遂げられているものと説明した著述であり、上のような戦争における日本擁護論も含み、岡倉の著述の中で最も時局的でイデオロギー色が濃い内容となった。しかしこの本では、岡倉の戦争に対する支持が単にナショナリスティックな動機のみならず、彼が凝視していたより長期的な問題との関連にもよることが示されている。

岡倉は「黄禍」(Yellow Peril)という西洋発のアジア像に対峙させるように、かねてより「白禍」(White Disaster)という表現によって非西洋における深刻な問題を提示しており、『日本の覚醒』でもそれを訴えた。黄禍論の流行に対し、西洋列強の帝国主義的侵略＝「白禍」(White Peril)を対置させた批判は日本や欧米の論者によって唱えられていたが、岡倉の主張の特徴は、軍事的・政治的次元の議論にとどまらず、「白禍」を非西洋地域の人間生活における根深い文化的問題をも含めた包括的な概念としていた点にある。岡倉の「白禍」批判では、普遍性を誇る西洋近代文明の伝播が、他の文化を単一の上下関係に巻き込んで衰退させる側面を持つ運動であり、それに直面した非西洋の人間が西洋優位の一元的価値のもとに歪んだ自己認識をするといった問題が指摘されていた。黄禍論が政治目的のために文化的差異の強調を行うイデオロギーであったのに対し、岡倉の言う「白禍」とは西洋近代を頂点とした政治的序列化が文化的領域にまで貫通している現象を問題化した、より深い次元の議論であった。岡倉のこうした問題意識において、西洋の大国ロシアに対する日本の戦争は世界的な文化的ヘゲモニーに対する反発のエネルギーになり、「全アジア」の問題にとっての打開になりうる意味を有していた。また、西洋化の弊害を白日の下にさらす主張を日本人が発することは、黄禍論否定のために「西洋対東洋」の対立図式を戦争の言説から排除しようとする日本の公式プロパガンダにとっては都合が悪かった。この点は、

岡倉が同時期の日本の対外的主張と一線を画していた部分である。

岡倉の思想において日露戦争がこうした積極的意義を持っていた反面、戦中の彼の文明論的発言は次の二つの問題点によって首尾一貫性を欠き、複雑な様相を見せていた。第一に、戦争に対する時局的対処と大局的視点による文明論とが整然とした論理によって区別されていなかったために生じた歪みである。第二に、戦争という国家間の政治的利害をめぐる争いを、文化的問題を含めた「白禍」の打開につながる契機として肯定的に昇華しようとしたこと自体が内包していた限界である。

第一の問題点は、岡倉の「アジア」像の変質として顕れた。黄禍論の否定に奔走していた在外日本人は、「黄禍」イメージのシンボルであったモンゴルとの民族性の違いを強調し、他方で日本とともに「黄禍」を疑われていた中国については、日本と同盟を組む動機がないことを欧米に向かって代弁するかのような発言をしていた。岡倉は前作の『東洋の理想』（1903）で、多様な文化が太古からの一体性のもとに広大な地域に共存する「アジア」という普遍的な文明像を描いていた。それに対し『日本の覚醒』では、モンゴルを文明の破壊者として自らの「アジア」から除外し、他方で中国と日本の「平和的」な「我々の文明の性格」というものを唱えた。岡倉は「白禍」批判のような高次の議論の展開と並行して、近隣の民族との類同性と差異を目的に応じて強調する在外日本人共通の主張と軌を一にしていた。岡倉は自らの文明論を動員して戦争への時事的対応の文脈に組み込んだことにより、自身の「アジア」像を矮小化させるという皮肉な結果を招いてしまった。

第二の問題点は『日本の覚醒』の最終章に見られる。ここでは一般的な日本の弁護が繰り返されるとともに、開戦から時間を経て岡倉が抱いた戦争への疑念が漠然としたかたちで示唆されている。岡倉の論理に従えば、近代化の「ジャガンナート」に乗った日本の戦争は、国家間の利害摩擦や近代戦争の仕組みがアジア地域にまで根づいてしまったことを意味し、このような世界構造の形成自体が「白禍」の産物であった。岡倉が「アジア」における「白禍」への抵抗手段としての意義を見出そうとした対露戦争も、所詮は「白禍」的世界構造のなかで通用する方法に則った行為でしかないという、当初から胚胎する矛盾に彼は直面しなければならなかった。アメリカ人読者に向けた『日本の覚醒』では、戦争に対する岡倉の期待と、その背後にあるより大きな構造への打ち消し得ない疑念との間で揺れ動いている彼の姿が浮き彫りになっているのである。

先述の新聞論説から約一年を経て 1905 年春に執筆した随筆では、岡倉は連戦連勝を果たしていく日本を「身の毛もよだつ戦争の光栄」を享受する「文明国」として揶揄する方向を選んでいった。その後の岡倉には、「アジア」の文化的問題を戦争によって好転させようとする志向性はもはや見られない。

岡倉は、一方で国家的一大事への早急な対応のために日本の公式の主張に寄り添い、戦争における日本の立場を文化的領域から支える役割を担った。他方で岡倉にとって、日露戦争は自らが凝視し続けていた非西洋の文化上の問題をめぐる闘争の場としての意味を有していた。しかし、目の前で進行する戦争を大局的な視点に立った問題の打開に繋げようとする彼の言動は、屢々国際世論に向けて日本を擁護しようという強いナショナリスティックな衝動と交錯しており、整然とした問題提起の論理になり難かった。岡倉が行おうとした「白禍」的世界に対する文化のための闘争は、戦争における政治目的のための文化の動員という行為と表裏一体となるグレイゾーンを背負っていたのである。

19 世紀後半から 20 世紀初頭に、非西洋の知識人が唱えた「東洋」「西洋」の文明論の多くは、それぞれのナショナルな主張と一体化されたイデオロギー的側面を持っていたと同時に、近代社会の陥穽を指摘し西洋近代中心の文化的ヘゲモニーを相対化する主張としての意義を併せ持っており、両側面が未分化なまま同時代の世界に発されていた。日露戦争期の日本のイデオロギーと、文化的「白禍」の糾弾がないまぜになっていた岡倉の発言はその一例であった。